

同圓異中心主義

吉田 靜 致

私は同圓異中心主義と云ふ演題を御通知して置いた筈でございます。斯う云ふ語は恐らく今まで用ひた人はないかと思ひます。是れは既に他の處で發表したことがあります、此處に御集りの皆様には始めての様に思ひますからお話し申上げやうと思ひます。

今晚の私の講演は人間の精神生活の特色に付てお話しするのが主眼であります。さうして人間の精神生活の特色が同圓異中心的なものだと云ふことを申したのであります。同じ圓であるが中心點が異なつて居る如きものであると云ふことです。人格の特色たる精神生活は身體が互に分離して存在する如きものではないので、其内容と云ひまじやうか實質と云ひまじやうか、それが可能的には全く同一のものである。吾々が自分の心と云ふものを普通には十分に徹底して自覺をして居らないのであります。本當に己れを知れば知るだけ、總ての人々の内容實質と云ふものが全く同一のものである、極端に完全に各自の心を其處に披き出して見ると全く一致すべき性質のものであると考へて居るのであります。其故に學術的の語を用ひて言ふならば各自の精神生活は可能的には一致して居ると言つて宜し

いのであります。現實の有様に於ては餘程發展して居る心の人もありませうし、又充分發達せず僅かしか發展して居らない人もありませうが、併乍ら立派に發展し得べきだけの能力は籠もつてゐる其籠もつて居る力が充分其處に現れて來る最後の理想を考へれば皆一致する譯である。其意味に於て可能的には同じ圓の如きものである、けれども中心點の側から言ふと互に異ひがある。我だ彼だ、甲だ乙だと云ふやうな個人的の區別は其中心の側から觀ての區別であつて、精神生活の實質内容は互に離れて居るのではないと云ふ趣意を述べたいのであります。身體が互に離れて居るやうに心が離れて居つて、其の離れて居る心が色々に結合して、さうして國が出來て居る社會が出來て居ると云ふ譯ではない。無論人間のことで身體を有つて居りますから、身體に關係する方面から云へば社會も國も離れて居るものが合して出來て居ると云ふこともありますが、私の今晚お話を致したいのは、さう云ふ肉體的或は生理的の生活の方面を言ふのでなくして、純粹の精神生活の方面に付てお話をするのであります。其精神生活なるものが同圓異中心的のものであると云ふことを申したのであります。無論其點に人間の精神生活——人格の特色があるのであります。亦他の點に於ても精神生活の特色を見出すことが出來ます。それで最初に他の方面からどんな特色があるかを二三お話しして、それと實は同一のことであるが異つた方面から名づけて同圓中心的であると云ふことをお話しして見たいのであります。

いろ／＼人格の特色に付て考へることは出来ませうが、兎に角人間に特有な精神生活、即ち吾々の人格と人格以外の動物とを較べて見ると著しく異ふ所があります。他の動物は過去のことを思ひ出して其れに基いて何うしやう斯うしやうと云ふ様な働きはして居らぬ。無論其動物が過去に於て爲したことが自然今の生活の上に影響を及ぼして色々習慣を作り生理的にも變化を生ずると云ふことは有りませうけれども、現在其動物が自分が過去に於て爲したことを自覺的に思ひ出して、あゝいふ過誤は再びしまいと云ふやうに過去の生活を思ひ浮べて其れに基いて活動すると云ふことはない。又將來と云ふことを考へて、何う云ふことを己れの理想とする、明日は一つ斯う云ふことをしやうなどと計畫をして行動をすると云ふこともない。唯現在の刺激に應じて所謂衝動のまに／＼行動するだけである。其故に彼等動物は人格から見るといふと暢氣至極です、唯現在に於ける苦痛と云ふことはありますけれども、過去のことに付て残念なことをやつた、恨めしいと云ふやうな煩悶或は心配もないし、又將來を考へることからして苦惱すると云ふこともない。其處が頗る暢氣である。之に比すると人間と云ふものは非常に煩惱の多いものである、決して暢氣でない。其故に若し暢氣を希望するならば何うしても人格を辭する外はない。けれども是れは不可能なことでありませう。

私は此事實を斯う云ふ風に説明して居ります。他の動物は唯現在と云ふ土臺の上のみ生活して居る、現在の生活をして居るだけである。けれども人格は違ふ。無論現在に生活をして居るが、同時に

現在を超絶した過去とか將來と云ふことを背景として其背景の上に生じて來る所の種々の要求を有つて居る、而して其要求に満足を興へやうとして居る。假に之を超現在の要求と名づけるならば、つまり人格と云ふものは、現在の要求と超現在の要求との間に板挟みになつて居るやうな譯である。其處に現在と超現在との間に非常に緊張を感ずるのである。英吉利の學者にボサンケットと云ふ人がありますが、吾々の人格と云ふものは有限と無限との間の緊張が現れて居るものであると云ふて居る。同じ意味で、現在と超現在との間の緊張を現して居るのが即ち吾々の人格であると云ふことも言へるのであります。兎に角緊張を感じて居る、決して暢氣でない。隨て人格には他の動物などに見得べからざる人格特有の生活がある。道徳的生活の如き其れである。是れ即ち緊張の生活にのみ有り得ることである。現在の要求では、眠くなつたら寝たいと云ふのであるから他の動物ならばサツサと寝てしまふ、少しも其處に問題はない。撲られたら仕方なしに起きるけれども、さう云ふ事故のない限りは寝てしまふ。自分が過去を考へ將來を考へて、こいつは寝てはならぬと云ふやうなことにはならない。所が人格になるといふと、現在の要求の方からは眠くなつたら寝たいと云ふのであるが、併乍ら過去のことを考へ又將來の理想を考へ、さう云ふことを背景として、是れは眠るべきでない大に奔走しなければならぬと云ふやうな要求が起つて來る。自然の傾きとしては眠いのであるが、是れは眠る可きでない、所謂「可きでない」或は何々す「可きである」。可しとか可からすと云ふ一種の道徳上の拘

束を感ずるのである、良心の命令とも云ひ、或は義務の感とも云ひませう。さう云ふ特別な生活が人格にはある。是れが今申しました現在の生活と超現在生活と云ふものを同時に具へて居る人格にのみあつて決して他の動物に見出すことの出来ないものであります。

現在にのみ生活するが宜いなんと云ふやうな間違つたことを唱へる人もありますが、是れは取るに足らぬのであります。現在にのみ生活せよと云ふことを文藝家の一部の者が申しますが、無論これは成立し得ない考であるのみならず、如何なる動機で、さう云ふ現在主義を唱ふるかと云ふことを考へると、甚だ忌む可き排斥すべき不都合な動機から來て居ると云ふことを發見しますが、是れは宜しくないと思ふ。先づ現在主義なるもの、批評を簡單に致して見ますならば、それは色々な意味に於て現在主義を唱へるのでありませうが、主なる形の現在主義なるものを解釋すると斯う云ふことであります。過去の事を考へて色々惱んだり或は將來の事を思ふて煩悶するが如きは愚の骨頂である、殊更にさう云ふ問題を自ら作つて惱むなんと云ふことは甚だ詰まらぬではないか、斯うせなければならぬ、あつせなければならぬと云ふやうな義務に追はれると云ふことは馬鹿げて居るではないか、國の爲に盡さなければならぬ、親に孝を盡さなければならぬ、彼方へ向いても斯うせなければならぬ、此方へ向いても斯うせなければならぬ、逆も負擔に堪えぬ、苦しくつてならぬ、此に於てか其惱みの出て來る本を絶つて、過去とか將來とか云ふことから縁を絶つて他の動物のやうに生活をしたならば何うか、

即ち唯現在の刺激の儘に、食ひたくなつたら食ひ、眠たくなつたら眠る、飲みたくなつたら飲む、其れだけで行つたら宜いではないか、現在に立籠もつて生活すべきである、斯う云ふのであります。けれども是れは理論上決して成立し得べき筈のものではない、理論上に於て既に自家撞着の説である、自滅すべき運命を有す、説である。何故ならば、現在主義と云ふ主義のあると云ふことが既に現在ののみ生活して居り得ないと云ふことを示して居る。本當に過去もなく將來もなく唯現在だけに生活して居る者があるとせば其者には現在といふ思想は無い筈である。現在といふ思想があると云ふのは、つまり現在に對して過去とか將來と云ふ思想があるときに初めて可能である、是れは色々な喩でも分らうと思ひます。若し此世の中に赤い色とか、黄色とか、紫の色とかいふやうな一切の色がなくつて唯白い色のみありと假定して、さうして其白い色のみの世界に吾々が棲んで居るとすれば、白と云ふ思想はない筈である。然るに一方に赤といふ色があつたり黄色と云ふ色があるからして、それに較べて白と云ふことを考へて、白が好いの何のと言ふのである。それと同じく、本當に過去と云ふことに基いた生活もなく將來と云ふことに基いた生活もない即ち他の動物の如くに現在にのみ基いて生活して居るとすれば、現在主義を唱ふると云ふことの有るべき筈がない。其證據には、いつ犬や猫が現在主義を唱へたか。さう云ふ主義を唱へざる彼等犬猫こそ本當の現在主義實行者です。本當の現在主義實行者は現在と云ふことを思想の上に有つて居らないのである。然るに人間は現在主義を唱へて居る、

現在主義を唱へて居る人間は最早現在にのみ生活して居らないのでありまして、現在主義の主張と云ふことが既に現在主義の自滅を示して居るのであります。其上に、さう云ふ主義を唱へて、前に申しました様な人格に特有な煩悶に堪えぬと云ふ意氣地のない連中が、其惱みを忘れんが爲に現在の耽溺を事とするやうな傾向が多い。享樂主義なんといふ語を用ひて居る。單に現在の種々な樂みに耽る。而も其れが肉體的官能的方面に於ける快樂に耽溺しやうと云ふ如き態度を取るに至つては既に其動機、の甚だ卑しい忌む可きものであると云ふことは言ふ迄もない。兎に角現在主義的生活は到底成立し得べきでなく甚だ不都合なものであるのであります。

人格は決してさう云ふ現在の生活のみを營んで居るものではない。勿論現在に生活しては居るが、同時に現在を超絶せる要求を實現せんとする生活をも持つて居る。即ち現在と超現在との間の緊張を感じつゝ常に現在を打破し超現在の域に進んで行くといふ努力のある所に人格の特色があると言ふて宜しいのであります。是れが人格の一つの特色でありますが、同様の特色を又色々の方面から觀察することが出來やうと思ひます。

次のやうな方面からも觀察することが出來ます。即ち人格は無限と有限との間の緊張の状態を示して居ると言ふても宜しい。一方から言へば吾々は確に限のある存在物である、有限の姿に於て生活して居るのである、けれども同時に吾々人格は無限の本質を其奥底に具へて居るといふことが言へるの

であります。是れも充分に研究する爲には多くの時間を要します、哲學の問題として決して小さくない問題でありまして、一々お話をすることは逆も出来ませぬから、唯簡単に無限的本質を具へて居るものであると云ふことを申して見ますならば、吾々が無限と云ふことを考へる、即ち無限なんといふ文字がある。無限を考へる所の吾々は何うしても無限の性質を有つて居らなければならぬ。己れ自身無限でなくて何うして無限を考へることが出来ませうか。宗教的に言ひますならば、或は神を信ずるとか佛を信ずるとか、哲學的に言ひますならば、絶對を考へると云ふことの如きは、さう云ふものを信じさう云ふものを考へる我が心の奥底に確に無限なるものがあると云ふことを示して居る。宗教に關して神を認める場合に於て「認めらるゝものも神であるが認めるものも神である」と云ふやうなことを古人が言つて居る。又ワレスと云ふ人は「神を作る存在物なり」と言ふて居る。即ち神と云ふ崇拜物を發見して行く所の存在物であると云ふのです。宗教的信者の立場としてはさう云ふことは言へますまい。宗教的信者の立場に於ては、自分より先に絶對無限の神があつて然る後に我と云ふことになるのでありますが、學問的に云ふと、つまり人格の奥底にある所の無限の本質なるものが外に寫し出されたものが神であると云ふ説明が合理的に出来ると思ふ。即ち私の無限性を投寫したものであるといふことが言へる。其れに就いての研究も多くの時間を費さなければなりませんまいが、兎に角其等のことを考へても吾々人格は其本質に於て無限なるものである。けれども有限なる現實の状

態の上に存して居る。そこで有限なる方面から来る要求があると同時に無限性を根底として其處から湧出づる所の要求がある。人格の上に於て其處に有限と無限との衝突を経験する。先程お話しした現在と超現在の間の緊張を感じるが如くに有限と無限との間の緊張を感じる所に人格の真相がある。それが宗教の現象となつて現れるのは勿論道德の現象となつて現れ、其外他の動物に見得べからざる人間特有の種々の現象がさう云ふ所から生じて來ると言ふて宜からうと思ふのであります。

それに聯關して爰に御參考までにお話して置きたいのは斯う云ふことであります。是れも他の動物に見得べからずして人格に於てのみ見ることの出來る現象であります。現在の要求に満足と與へたときには普通に所謂快樂の感情を起す。是れは動物にもあります。腹の空つた時に旨い物を食べれば快樂を感じる、其外にもう一つ斯う云ふことがあります。超現在の要求即ち現在の要求でなく、過去將來を考へ、人格特有の根柢から生じ來る要求に満足と與へた時には普通の快樂と云ふことゝは性質の違つた満足を感じる。假に福祉と云ふ言葉を用ひませう。そつういふ眞の満足は他の動物には無い。隨て人格に於ては斯う云ふ現象があります。現在の要求に満足と與へず却つて苦痛を感じて居る、例へば腹が空つて堪まらぬけれども食はずに居る、隨つて苦痛であるが、超現在の要求に満足と與へて居るが爲に非常に福祉を感じて居ると云ふことがある。自分が食はずに自分の親しき者に其れを與へる、自分が食はずに子供に食はせる、即ち自分は現在の要求に關しては大なる苦痛を感じて居る

が併乍ら超現在の的背景の上に立てる人格の要求に満足を與へたと云ふ點に於て福祉を感じて居る。故乃木大將の如きは、苦痛を感じせられると云ふやうな事柄に於て人格者として大なる福祉を感じられた崇高な人物であつたと私は信じて居りますが、さう云ふことが確に有る。それと丁度反對に、普通の所謂快樂は非常に多く感じて居るが人格としては少しも眞の満足を感じないと云ふことがあります。自分は腹が空つて旨い物を食つて居るけれども衷心精神上の眞の福祉を感じて居らぬと云ふことがある。それは現在の要求には満足を與へたけれども超現在のの方面の要求に満足を與へてゐない時であります。さういふやうに單なる快樂と眞の福祉と二種類あつて而も其れが兩立して感ずることがある。非常に苦痛であるけれども而も其れに負けない所の絶大なる満足が之と兩立して居ると云ふ現象は確に人格に於て發見されるのである。是れは現在のと超現在のと云ふことに就いて言ふたのでありますが、同様のことが有限無限と云ふことに就いても言ひ得やうと思ひます。有限の境遇より生じ來る要求の満足は所謂快樂であるが、無限の人格の要求より生じ來る所のものに満足を與へる場合には福祉を感ずると云ふことになる。

尙もう一つは特に同圓異中心的の生活に直接關係あることでありますから其れを是非お話致して置かなければなりません。人格は一面に於ては個人である、個體でありますが、同時に其本質は全體である、或は普遍と云ふ語を使つても宜からうと思ひます。即ち一方から言へば一個人であると同時

に倫理的に言へば社會的と云ふても宜からう、つまり一個體であつて同時に普遍であると言へるのであります。是れは常識的に吾々が承知して居る事であります。腹の空つた時に自分の好きな物を食べれば則ち自分といふ一つの生理的存在物として一個の動物としての一個體の満足はそれで確に得られる。けれども人間は其心と云ふものを解剖して見ると本來社會的である。動物としての個體的存在の範圍に精神の内容を限つて居らぬ。現に自分の子が飢に泣いて居ると云ふやうな時に其親が自分だけ食ふと云ふことはしない。親の方は確に然うである。子の方には随分親が飢に泣いて居るに拘らず自分だけ食つて居ると云ふことはありませうけれども、併しそれでも本當に己れと云ふ精神につき自覺を有つときには決して自分だけ食ふといふことでは満足出来ない筈になつて來るのであります。兎に角人間としての心の自覺が深くなればなるほど、自分といふ一個體を満足させることだけでは眞の満足を得ることが出来ない。其處に社會的とか或は普遍的と云ふ方面が有るのであります。即ち國民としての自覺が深くなればなる程、國家の榮えることを見ねば衷心満足を感じないと云ふことになるのであります。然るに他の動物に於ては其自覺はない。其處に矢張人格の特色がある。一方から言ふと一個人であるが他方から言ふと普遍的な社會的なものである。それに丁度聯關して實は今晩の演題の言葉が出て來るのであります。自分とか他人とか、甲の人とか乙の人とかと云ふて區別をするが、其れは普通個體的區別と云ひますが、其個體として見られる場合は前にお話致した中心點の側からであ

ると云ふ説明になるのであります。けれども其人の精神生活の側から云ふと實は皆共通なる普遍である、同一の圓であると云ふのが私の主張したい點であります。

そこで少しく學問的に偏するやうな事になりませんがお話を致して置きたいのは、普通には事物の組織とか構造とかを分類して機械的と有機的との二種類として居る。何う云ふ場合に機械的と云ふかと云ふと、生きて居ないもの、即ち無生物に對して、是れは機械的に組立てられて居ると云ふ。是れは分り切つたことである。それから生きて居るもの即ち生物に對しては、有機的に組織されて居ると云ふ。是れも一般に認められて居る所であります。そこで人間も矢張り生きて居るものでありまして、他の動物と共通の性質のものである。其共通と云ふ範圍内だけで言ふならば有機的のものであると言ふて宜しい。第一人間の身體其ものが既に有機的に組織されて居る。又さういふ生きて居るものが大勢集まつて組織して居る所の團體も、單に生物の集合としたならば有機的に構成されて居るといふことが出来るのである。けれども人間には單に生きて居ると云ふことの上にもう一つ大事な生活がある、即ち精神的生活である。此精神的生活なるものは無論機械的に成立つて居るものでないのみならず有機的とも言ふことの出来ないものであると云ふことが今晚お話をしたいと思ふ主眼の點であります。有機的と云ふことは斯う云ふことを既に豫想して居る。即ち其處に結合されて居る多くの別々の部分が存在して居るのである。普通所謂細胞なるものが澤山集合して居るのである。離在的なる各部分が

結合して全體を成し互に目的となり手段となるといふ關係を作つて居る。無論其の一角離れて居る別々のものが結合して成り立たないといふ程にも深き關係を有つて居るのであるが兎に角離れて居る別々のものが結合して居るといふ状態である。人間も單に生物としてはさういふ状態である。けれども、さういふ生理的方面とは全く種類の違つた精神生活と云ふことになる。離れて居る別々のものが結合すると云ふやうなものではない。そこで私は物の組織とか構造とかを分類するときには、機械的組織と有機的組織との上にもう一つ同圓異中心的の性質のものがあると言はねばならぬと思ふのであります。精神的に觀たる社會、精神的の方面から觀たる所の國家と云ふものは、決して互に離れて居るところの精神が結合して出來て居るといふやうなものではない。同圓異中心的のものである。吾々個人即ち肉體的生理的に云へば互に離れて居ると見られるやうな其個人の心の側から云へば實は其内容が皆一致して居る。中心點は異つて居るけれども可能的には皆な同じ圓である、國民各自と國家と其内容實質が別物ではない。我と國家と其内容は同じものである、總ての國民が其内容を一にして居る、隨て國家と我とは其内容が全く一つであると云ふことになる、實質内容に於て別のものでない。其意味で機械的でないばかりではなく有機的でもありません。それで私は機械的と有機的と云ふことの上に、もう一つ同圓異中心的と云ふ語を用ひて人格の精神生活の特色を言ひ現さなければならぬと思ふ。普通にはさう云ふことを言ひませぬ。普通には矢張國家とか社會と云ふものを有機的であると申して居ります

が、是れは至らざるものと思ひます。成程生理的存在物として取扱ふときには然うである、けれども精神生活と云ふことに就いては然うでないとは私は確信して居ります。

是れは決して日本に於てのみと云ふ譯ではありませぬ、西洋に於ても其理想的な生粹の精神生活を其處に持つて來たら同じことになると思ひますが、殊に日本に於て其れが最も多く見出されると思ひます。吾々は家といふ生活をして居るに當つて、家と己れとは内容實質に於て一致して居ると云ふ氣分で生活して居る、少くとも日本人は然うであらうと思ふ。離在的の別々なものが寄集まつて結合して家を拵へて居ると云ふやうな、そんな水臭いものではないと思ふ、家といふ精神生活は家族の精神生活と全く同圓である、唯々中心點の方面より見て我だ彼だと云ふことになつて居るに過ぎない。甲と云ふ中心點から其圓を内容として統一して居る、乙といふ中心點から同じ圓を内容として統一して居ると云ふやうな譯で、其實質の上に於て全く一致する所の圓であるが中心點が異ふ。幾何學的に云ふと、圓が同じならば中心點も同じ譯であるが、無限に廣大なる圓であるから何處へ中心點を持つて行つても差支ない。有限の圓であればいけないけれども、無限の圓を想像するならば無數の中心點を考へることは少しも矛盾しない譯である。若し中心點と云ふのが不都合ならば焦點と云ふことに變へても宜い。兎も角内容の側に於ては離れて居るものでない。現に同じ思想を有つたときには内容が同じいのである、同じ感情を有つたときには内容は同じいのである、身體と同じ様に之を解釋しては大

變な誤解である。身體は別々に離れて居りませうけれども、思想の内容を空間的に離れて居る如く解釋するのは宜しくない。同じ考を有ち同じ理窟を考へれば、其點に於て其二人の人は全く一致して居る、重なつて居るのであります。さう考へて見ると寧ろ斯う云ふことが言へるのです。中心點と云ふ方を忘れて内容の方から云へば、過去の我と今日の我の方が寧ろ違つて居る、却て他人と今日の我の方が同似して居ると言へる。過去の我と今の我とは大變な違ひである、唯々中心點から觀て一貫して居る譯であるけれども内容は違つて居る、昨日善いと考へたことを今日悪いと覺つて居ることが幾らもある。我と彼、甲と乙と云ふ區別に執着して離在的に考ふるのは餘りに中心點に囚はれ過ぎて居るのである。兎角中心點に囚はれ勝ちなものである。是れは己むを得ないことです。一體心理學上人間の感情快樂とか苦痛とか云ふ感情と云ふものには「自分だけのもの」と云ふ特色がある。私が感じて居る所の快樂の感情其ものは、私だけのものである。これは他の人には感ぜられないものである。だから感情と云ふものは個人的主觀的といふ特色を有つて居る、己れにのみ内的に直接に現れて來ると云ふ個人的な主觀的な方面がある。其點から言ふと、自分だけのものと自分以外のものと全く相容れざる性質のものであると云ふことになりましたが、若しそれに囚はれて、我と他人とは全く離れたものと云ふならば其れは非常な間違ひである。何故ならば、感情と云ふものは斯かる直接的な主觀性と云ふものだけで成立つて居るのでなくして必ず其れに結付いて居る内容がある。直接性とか主觀性と

云ふことは感情の形式である。感情の中心點の方面だけに付いての通用性である。さういふ風に直接的に主觀的に現れる感情に結付く所の内容を考へると其れは共通な普通なものであると云ふことになる。

極く著しい例を以て之をお話するならば、忠臣藏なら忠臣藏の芝居を見て或る悲劇に出會ふて悲みの情を起したとしませう。皆涙を拭ふて居ると云ふ悲惨なる劇である。其場合にて各々の人の感ずる悲みの感情の直接の主觀性から云へば人々皆別である。私は私だけに於て内的に直接な感じを起して居る。此直接な主觀的な感じは他の人が感ずることは出來ない。其代り又他の人に直接に現れて來るものがある。それは即ち中心點の側からの話で、其感情の中心點に結付いて來る内容とは云ふことになる。忠臣藏なら忠臣藏の悲劇といふ事柄として共通の内容を有つて居る譯になつて居る。吾々は共通の實質共通の内容と離れずに其れに結付いて直接的に主觀的な感じを起して居る。感情と云ふものは直接の主觀性だけで成立つことは出來ませぬ、必ず其れに伴ふ所の内容がある筈である、圓がある、其圓が共通である。

然るに普通には其直接な主觀性と云ふ方にのみ囚はれます。即ち中心點に囚はれ過ぎて我彼の區別と云ふものを全く離在的に觀るといふことになり勝ちである。大變な間違ひです。必ずそれに伴ふ所の内容を考へなければならぬ、而も其内容も出來得るだけ徹底して深く自覺されて來なければならぬ。

假令内容を考へるにしても、之を餘りに狭く小さな圓に考へると互に行違ひが生じて復た互に離れて居る如く考へる虞がある。けれども是れは至らざるもので、徹底して考へれば考へる程それは最後には全く同一なる普遍的なるものであると云ふことにならざるを得ない。けれども現在に於ては各々の人が各々其人の程度に應じて廣い圓に考へるものもあり狭い圓に考へるものもあり色々でありませう。併し是れは徹底して自覺すればするほど皆一致するものになる可き本來の性質を有つて居るのであります。其故に或る一人が誠心誠意自分の心底を披瀝するとそれが他の人を本當に動かして、丁度我の心の眞を言ふて呉れたと云ふ感情を起させます。大文豪が心血を注いで著した所の作物を讀めば、丁度我が言はんとする所の心情を言ふて呉れたと云ふことになつて居る。日本國民なら日本國民として本當の眞心を曝け出した所の古今の偉人を理解するといふと、本當に自分の國民としての眞の状態を其處に見出すことが出来るると云ふ譯になつて居ると思ふ。自分の事を言ふて居るといふことになる。だから徹底して己れを知りさへすれば其れが總てを知つた譯になる、自分を本當に知れば他人を本當に知つた譯になる、即ち總てを本當に知つたことになる。

斯様なことは無論何處の國の人でも本當に分つて來れば皆氣着くことと思ひますが、丁度さういふことを曰ふた學者の書物を讀んで獨り愉快に堪えないことがあるのです。伊太利のヴァリスコーと云ふ學者でありますが、其人が「汝自身を知れ」と云ふ書物を著した。己れを本當に知りさへすれば他

の總てを本當に知ることになる、己れを知ればよいと云ふ考であります。其人の考では、此世には無数の心がある、我の心、彼の心、甲の心、乙の心と云ふやうに非常に澤山ある、心としては皆別々である、併乍ら皆が皆同一の内容を有つて居ると云ふのです。決して離れたものではない、内容の側から言へば同一であると、斯う云ふのです。而して其次に又斯う云ふことを曰つて居る「此世は實に多中心的構造を有するものである」と。即ち同一の圓であるが中心點が澤山あると云ふのです。それであるからヴァリスコーの云ふ多中心的と云ふのは丁度私の云はんとする同圓異中心的と云ふことでもあります。私も初は成程これは丁度自分の主張せんとすることゝ同一であると考へて多中心的といふ語を使つたら頗る面白いと思つて一時其語を使つて見ましたが、併し唯々此字を見ますと、別々な中心點で、自分は自分、彼は彼と云ふ風な意味に解釋されて、却て個人主義的のやうに誤解されては困ると思ひまして、今では同圓異中心的と云ふ語を使ふことに致しました。兎に角精神生活は確にさう云ふ性質のものと私は確信して疑ひませぬ。或る學者は鋭い句調で斯う曰ふて居ります。「我が他人と同一でない」と若しするならば何うして我が自身と同一であるといふことが云へるか」と。是れは中々意味がある。我が我自身と同一であると云ふならば何故我が他人と同じといふことが云へないか。中心點から云へば成程違ふ。けれども内容から云へば昨日の我と今日の我とは違ふ。違つて居るのであるから若し我が他人と同じでないならば我が我と同じと云ふことも實は云へない譯である。又斯う云ふこ

とも云へるのであります。同一の人でも其内容は無窮に變化し得ると云て宜しい。理想的に可能的に言へば完全に無限なる圓ではありませうけれども、現實の境遇の上に段々發展して行く有様から云へば非常に狭い時もあり非常に廣い時もあり様々になつて行くのであるから、同一の人でも其内容の中に無限の變化があり得る譯である。それと同じ筆法で、違つた人々の經驗の間に於て又非常に無限に同じと云ふことが有り得る譯である。それを徒らに中心點に囚はれる、よし又其内容を考へるにしても之を餘りに狭く制限して考へては大變な間違ひである。肉體的方面に於ては離在的といふことになるけれども、精神生活の上に於ては決してさういふことは有得べからざるものと思ふ。これは全く己れを本當に知るの明を缺いて居るが爲である。即ち「汝自身を知れ」と云ふ書物の出たのも大に意味ある事と思ひます。

又同様の理窟から斯う云ふ結果が出て居る。精神生活に關する眞理の研究に就いて二つの方法があると思ひます。一つは人格が今まで爲じて來たこと即ち古今東西の人間の精神生活の色々の事實を集め來つて比較研究して、其間から共通のものを概括して、是れが即ち人間の生活の眞であると云ふやうな、即ち客觀的比較的研究と云ふ方法も確にあらうと思ひますけれども、同時に又斯う云ふことがあります。即ち某一人の自分の精神生活の眞を徹底して理解する、其れを偽りなく誠心誠意發表したとすれば、聽て有ゆる人の眞を其處に見出し得たと云ふことになり得る譯であります。宗教とは抑々

何ぞと云ふことを研究するに就いても同様で、古今東西に現れ來つた各宗教を比較研究して、其中から共通の方面を概括することに依つて宗教の本質を定めると云ふことも一の方法でありませう。同時に又某一人が自分の衷心經驗した所の宗教的意識なるものを偽りなく其處に披瀝し來つたときにはそれが懸て有ゆる宗教の本質であると云ふことも言ひ得る次第である。それであるから客觀的方法と主觀的方法と云ふものは決して矛盾するものでない。主觀的に自分の眞を捉へて其れを發表すると、それが客觀的に眞理である所のものになつて居ると云ふ事實が人間の精神生活に就て見出さるのである。即ち前に申しました或作家が心血を注いで、人間の精神の眞相は斯う云ふものだと言ふことを會得して發表すると他の人が其通りだと云ふ、何も一々、君はどう云ふ精神状態だ君はどう云ふ精神状態だと云ふやうに歸納的に研究して結論を導き出すと云ふやうな廻り諱いことをせずとも宜い。某一人の眞の有様を其處に出せば有ゆる人の眞を捉へることが出來ると云ふことが精神生活にはあるのである。さうして此の事實が既に吾々の精神生活なるものが同圓異中心的なものであると云ふことを立派に證據立てゝ居るのである。主觀的のものが直に同時に客觀的であると云ふこと、事實が人間の精神生活は中心點より見れば互に異なるが其の内容即ち圓の方面より見れば全く同一のものであるといふ道理を明白に證據立てゝ居ると私は確信するのであります。

同圓異中心的と云ふ語は甚だ解り難い語でありますから、もつと通俗的に言へば同心一體的と言つ

ても宜しい。つまり本質實體は同じものと云ふ意味であります。是は詳しくお話すれば六ヶ敷い哲學問題にまで入りまして今夕さういふことをお話するのは不適當と思ひますから其問題に入りませぬ。唯以上申上げましたやうな意味で、少くとも精神生活と云ふものは同心一體的である、同圓異中心的である、ヴァリスコアの言葉を借りて言ふならば多中心的であると云ふことは疑ないと思ひます。

而して其精神生活の特色をより多く發揮して居るほど本當に其人は人格を發揮した譯であらうと思ふ。そこで私は日本の國民道德と云ひますか國民の道德思想と云ひますか、其所に於て最も大切なる中心的部分を占めて居るものは實に同心一體的生活であると信じます。即ち同心一體的生活と云ふことが日本民族の發揮せる一大精華であるのであります。精神生活として、我と家、我と國家と云ふものは全く内容が同心一體である。さうして其氣分で生活し、國の爲に盡し家の爲に盡すといふことを爲し、それがやがて己れの面目を立派に立てたことになるのである。所が然うでないやうに考へる間違つた思想も随分有る。それは何う云ふ思想かと云ふと、もと同心一體であるべき己れといふ個人とか家とか國とかいふ全體とを抽象的に離して考へ、事實有得べからざることを抽象的に別々に離在的に考へ、さうして置いて此個人と全體と云ふものゝ間を何うして調和して行かうかと云ふやうな餘計な問題を造つて居る。甚しきに至つては、ヤレ其個人と云ふものが大事である、個人が目的である、個人の上のみ價值があるとなし、其個人の目的の爲に國とか家と云ふものを手段となし道具となす

と云ふやうな間違つた個人主義がある。是は甚だ不健全な危険な思想である。唯動物的生活としてはさう云ふことがあるが精神的存在としては有得ないことである。兎に角これは甚だ不都合な思想であるが、同時に又これと正反對の極端に陥りたる謬れる思想もあります。即ち同心一體的若くは同圓的で其の内容實質に於ては決して離れて居らないものたるに拘らず態々個人と云ふものから抽き離してしまつた所の幽靈みたやうな全體を考へる。私の趣意を以て言ふならば、本當の全體と云ふものは個人そのものと離れて居ない所の同心一體としての精神生活其ものであるのだが、さう云ふものでない所の、まるつきり抽象された幽靈の様な妙な全體を考へて其れにのみ目的を置き其れにのみ價值を認むるやうな間違つた考へ方をする。そこで個人の面目を潰し人格と云ふ意味を滅却するやうな甚だ不健全な、或意味に於ては危い所の誤つた全體主義と云ふものが生じて来る。それは先程申しました誤つた個人主義に對する反動であらませう。而してさう云ふ全體主義が跋扈すると必ずやそれでは人間としての精神生活は満足が出来ない。精神生活の本質は同心一體的のものである、其同心一體的なる生活を營みつゝあるところの此我と云ふものを全く滅却する如き意味の間違つた全體主義が出て來たならば何うしても人間は承知をしない。其故に彼の不健全な間違つた個人主義を誘發するに至る。そこで又本當の道理を覺らない所の極端な間違つた個人主義に趨る、間違つた個人主義に趨るといふと其れの反動として又間違つた全體主義に趨ると云ふやうな譯で、常に兩極端の間を行きつ戻りつして

居つて決して正しき道理に落着くことがない。西洋遊りに行はれて居る思想の歴史を辿るとさう云ふことが多い。さう云ふことに決して惑はさるべきでないと思ふ。其處に至りますと國民は自覺して居らないのでありませうが、私の考へる所では確に我が民族は同心一體的生活を續けて有つて居ると思ふのであります。我と家とは同心一體である、我と國家とは同心一體であると云ふ氣分にて生活して居る。隨て其意味に於て家の爲に盡し國の爲に己れを献げて居るのである。其献げると云ふ意味は同心一體的に反對するやうな私利私欲を棄て、同心的一體的生活を全うすると云ふのであります。即ち國の爲に盡すと云ふこと其れ自身即ち自分の本心を立て、行き自分の面目を活躍して行くと云ふことである。昔の武士が主君の馬前に於て身命を棄てると云ふことは決して自分を無くすのではありませぬ。其處に武士としての人格を確立したと云ふ感じを以て彼は君の馬前に命を棄てるので、決して全體と個人とを互に離れたものとして考へて其全體の爲めに個人を犠牲にすると云ふ意味ではない。今申した所の同心一體主義に反對する所の要求は之を吾々は自利私欲と云ふが、其自利私欲を棄て、而して本當の自分の精神生活を立派に打立てると云ふことである。自分の精神生活と云ふと語弊があるが、即ち國の精神生活家の精神生活である。全體と己れとは別物ではない。個人と云ふ語があり全體と云ふ語があるからツイ惑はされて、離れて居らないものを離れて居るが如くに考へて、而してさう云ふ間違つた個人主義が起り又個人を全く滅却するやうな間違つた全體主義が起るやうにな

り。さうして應て間違つた個人主義を誘發するやうなことになるのである。これは皆本當の人格の真相を捉へないからである。さうして其真相は我が民族に初から儼然と具はつて居る、國民思想の中心を成して居ると思ふ。我と國とは同心一體である我と家とは同心一體である。それ／＼の中心點の側から、盡す道、自分の擔任して居る所の方面、それは色々違ひがある。其違つた方面に於てそれ／＼自分に適する所の道行を経て全體の爲に盡す事柄は皆違ひます。或は學者として、或は藝術家として、或は軍人として、或は政治家として皆違ひませうが、併ながら要するに同心一體のものであつて唯だ中心點からそれ／＼區別を立つべきである。互に離れて居ると云ふ意味に於て我とか彼とか云ふ區別があるのではない。内容實質の側から言へば可能的には全く一致して居るので、中心點の側から言ふと區別があるまでのことである。其區別は互に離れて居るものゝ間の區別ではなくして同中の異である。是は餘程言表し難い關係でありますが、一體言葉と云ふものは非常に不充分である、本當の道理は言葉なんと云ふ死んだ道具で言表することは出来ない。だから言葉に囚はれてはなりません、兎に角同中の異である。離れて居るものが結合して居るのであるなど、思ふものだから、從來は有機的組織と云ふ位が最も好い説明と考へたが、決して然うでないと思ふことを熟々悟りました。

尙今の事に付きましてもう一つだけ参考にならうかと思ふことを附加へて置きます。誰も然う考へて居るやうであるが、國と云ふもの社會と云ふものは一種の精神的存在であると思ふ、又人格的のも

のであると考へる、所が國とか社會とか云ふものをさう云ふ人格的なもの精神的なものと見るといふことの説明には多くの學者が苦んで居る。澤山の精神といふ部分が集まつて組織して成りたる全體そのものが其各々の部分と同じ様な精神だと解釋することは論理的に困難である。個々の澤山の人格が集まつて組織して居るものを其個々と同じ意味の人格だと云ふことは論理的に考へ難い。丁度個々の兵卒が集まつて居る所の軍隊を其個々の兵卒と同じ様な一兵卒だと云ふことが不合理なるが如く、又星の澤山の集りを一つの星だと云ふことが不合理なるが如くに、個々の澤山の人格の集りを一つの人格だと見るといふことは言へぬ、國を人格と見ることは無理である。國を精神的存在と見ることは困難である。併かしこれは有機的に見やうとするからのことである。何故もう一步進まないか、何故人格と云ふものを同心一體的と解釋しないのか。同圓異中心的と解釋しないのか。別々に離れて居るものが結合して組織せるものの如くに考へて居るから斯かる不合理に陥るのである。丁度單なる生物の程度位に國家を見て精神的存在物と見ないから然ういふことになる。段々お話しして參りましたやうに精神生活と云ふものはさう云ふ事とは全く違ふ。精神生活は決して機械的とか或は有機的とかいふ形容詞を以て呼ばるべきものでない。無限に大なる圓としては可能的に同一であるが唯中心點と云ふ側に於て區別あるだけのことである。主觀的直接性といふ形式の上から見れば自他彼此の區別があるけれども、それに結付いて來る所の内容から言へば可能的に同一のものであると見る可きものと思ひま

す。さう云ふ風な解釋が國民對國家の關係個人對社會の關係の眞意氣を捉へたことになる。要するに精神生活の種々の特色を段々研究して行つたならば、今まで解釋の出來なかつたやうな解釋も容易く付きはしまいかと考へて居るのであります、勿論此問題は餘程哲學的の方面に觸れて居りますので、之を徹底的にお話致しますにはまだ／＼申上げたいことがありますけれども、兎に角唯今までの所では何うしても有機的に解釋するのでは満足が出來ない。精神生活の特色は同圓異中心的なりといふ處にある。それが本當に分つて來て其態度に立つて生活するときに人格としての生活をして居る時である云ふことを信じて疑はないのであります（完）

